



後篇

中村俊定文庫  
文庫 18  
363





小綴をいへば連のまは月あつたは  
る〜いへに一りれまき〜宛あつた云も  
附らぬは美とするに多〜ははははははは  
よ、唯名は僻成りあきま〜ま〜ま〜ま〜  
おあ〜いへ〜はのほのほの門の風は体〜  
その他はた〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜  
た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜  
た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜  
た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜

や〜〜〜ありのははははははははははは  
紫の霞は去ぬの影は〜〜〜  
よは〜〜〜あははははははははははは  
を〜〜〜た書を来〜〜〜た〜〜〜た〜〜〜  
すはか〜〜〜た〜〜〜た〜〜〜た〜〜〜  
を〜〜〜た〜〜〜た〜〜〜た〜〜〜  
うりこ〜〜〜た〜〜〜た〜〜〜た〜〜〜  
を考ふ〜〜〜た〜〜〜た〜〜〜た〜〜〜

よき風ふくむる古よきんじふ  
と道よ小篇にまじり梓よ  
いらぬ思のりてけりす  
まア祭

道よのふも素道あり

素道あり

寶曆九<sup>巳</sup>卯年冬

スル所

素道



附合

此の世に成るるは休庵さく

多岐を成るるは休庵さく 素

藤 此の世に成るるは休庵さく

草とのいさく成るるは休庵さく 全

夏極の筆はもて筆を擲し

秋の筆はもて筆を擲し 全

冬極の筆はもて筆を擲し

何れも筆はもて筆を擲し 全

了定の筆はもて筆を擲し

七ノ世に成るるは休庵さく 全

目代のまゝいふ初あ〜

癒るゆ〜休れ厚よかあ〜  
全

夜、癒意よほふ〜御〜

竹の子意 氣よい〜き  
全

長きよ曹洞の活をゆけ〜

来つ〜れふ〜ち上り〜  
全

意、癒〜もや〜を癒

高の押〜お音 好〜  
全

三弦を久〜子に〜

おま〜夫〜極素〜  
全

〜り〜い〜男〜

系葉のけしき

五

葉よ緑ふと新編のあけ

節のふ中たふの終も

全

取撰のたと紙にたけは

体中道一いふの終

全

雪よあや雪と明津のあけ

雪よひまうと終に撰

全

あくものよとぬとあけ

和当すゝと終に撰

全

破、理とはりとの終

本の名と表のあけ

全

五

六

すけのききふかおれ晒布

喜ばれし神いさゝし返り場 全

喰ふものもたひよるは群り

恥ふいありし神いさゝし返り場 全

己の窟は飯もあふりし返り場

借忘し借い久しうりし返り場 全

内事りもき程は所のし返り

治事れやそのめ房あふりし返り 全

白くくくく松の目もささ

沖雲れ道の畠おし返り 全

虫は糸はあつても返りを返り



ぬくくくくくくくくくく

全

ふんふんふんふんふん

んんんんんんんんんん

全

んんんんんんんんんん

んんんんんんんんんん

全

んんんんんんんんんん

んんんんんんんんんん

全

んんんんんんんんんん

んんんんんんんんんん

全

んんんんんんんんんん

んんんんんんんんんん

全

肩すぢのあそびかゝりぬき

いゝゝゝのうらなひはなほ

いふはなほのうらなひはなほ

あはれはなほのうらなひはなほ

いふはなほのうらなひはなほ

いふはなほのうらなひはなほ

いふはなほのうらなひはなほ

いふはなほのうらなひはなほ

いふはなほのうらなひはなほ

いふはなほのうらなひはなほ

いふはなほのうらなひはなほ

いふはなほのうらなひはなほ

天竺

全

かし粉いとぬ尻たり水  
所そのに百口ぬ故清く  
全

停舟よ清く下戸いあ  
微語れを揚ぐかう望  
全

所清いきく一蝶れゆ  
帯通れいろはに蝶と結り  
全

可きぬ二十部一也部  
如る能れ現ふふ者  
全

舟枝と子にほほむ  
ほしけふさ  
全

御名ふまに而目明く清く

人との福やあせりて久しむる 全

道に舟とて 全

殿様にてお人の懐柔ほや 全

子に時分知りて月此座を 全

芳甲陣へ遊ば分限者 全

此とのゆはも紙を此書ふる 全

おぬこゝあまのいさやて 全

あま月と田にいさやて 全

案内さゝ案内部 全

池の里もあまのいさやて 全

黄砂此懸縁界にけりて 全

風名浦北流より南へ里段

より居長久しく此方より

全

赤糸も川や布や白

甲は首の被より

全

口は子等より此方より

自北時より二時と

全

松より此方南の考

鞠垣北流より此方

全

楳嶽に居れり此方

より此方入る此方

全

橋入より伊達此方

松より

おしり 湯田も湯田の心は 全

新涼子 湯子 湯子 湯子

湯子 湯子 湯子 湯子 全

代 湯子 湯子 湯子

粽の湯子 湯子 湯子 全

小 湯子 湯子 湯子

湯子 湯子 湯子 湯子 全

月 湯子 湯子 湯子

湯子 湯子 湯子 湯子 全

湯子 湯子 湯子 湯子

湯子 湯子 湯子 湯子 全

時をわたりておぼしき清は中絶す

清との交りもあはれ一絶 兼

年と毎の掃縁にわたり

清へ塔は新く横より 全

翼下波の層は風ふきよ

美の如くくく阿の 新の 全

昔見付く 同の華の

も清も昔のくくく物ねい 全

清もくくくくくくくく

くくくくくくくくくく 全

清もくくくくくくくく

来れふか〜〜ふなたつ

全

ゆ〜二ふ子標〜海〜

き〜何〜捕〜海〜此〜

全

家〜を〜〜い〜海〜船〜屋〜の〜

た〜山〜此〜不〜此〜是〜よ〜と〜

全

鹿〜控〜此〜師〜の〜海〜已〜に〜あ〜わ〜

聖〜〜如〜控〜〜い〜法〜種〜さ〜ひ〜

全

干〜の〜を〜は〜色〜の〜を〜月〜小〜

二〜海〜此〜敵〜の〜お〜中〜り〜

全

机〜此〜机〜此〜此〜小〜

長〜〜なる〜聖〜海〜志〜は〜

全



長門の女はとてはなれぬとて

ハツ橋の女はとてはなれぬとて

所とてはなれぬとてはなれぬとて

人の子はなれぬとてはなれぬとて

舟の女はとてはなれぬとて

若くはなれぬとてはなれぬとて

白くはなれぬとてはなれぬとて

初はなれぬとてはなれぬとて

庭の女はとてはなれぬとて

庭の女はとてはなれぬとて

庭の女はとてはなれぬとて



ふいと母懐をくしたるは

糸を今も手につれては

全

あうらうと浦津の波は

清くはくし向ふらん

全

きみうらむと雲を渡りて

楳娘はよひ大なるは

全

女子は借る心ゆき

泪も叶はぬは

シヤクハナ

全

おきさひちよあはれ

きよりと手松は

全

初はれはあはれ

夫何〜〜〜  
○  
全

ふ山崎〜〜〜

〜〜〜  
全

新〜〜〜

紫花〜〜〜  
全

秋実〜〜〜

〜〜〜  
全

又知〜〜〜

〜〜〜  
全

父月〜〜〜

〜〜〜  
全

形南於海走此乃北東海家

新々乳之原於子學之

全

意子同之有山也

學官此之端小五系於之

全

風轉此秋也望十之

不抑子以考小磁此味至

全

系成後子於之

新移於川也際以不

全

高室小能乃之人

後子於之

全

確子至京の秋也

加子解之

全

被たぬ衣もふしむ

糸子のいづれもよき

全

髪よきしは髪に

髪よきしをばか

全

ちうくはれをばか

うきも教はれ

全

丸玉は海に

江湖に

全

二重の

以今

全

之は

猶此無婦也口屋子志以の 全

祥此字以ハ何種の如ク

筆此字を分於小重如力以ハ 全

如物此字ハ今如クハ古如ク

古如クハ今如クハ二ハ七ハ 全

名月此字研之於加更也

毛村ハ今ハ古如クハ今ハ 全

今ハ今如クハ今如クハ 全

新如クハ今如クハ今如クハ 全

今ハ今如クハ今如クハ 全

今ハ今如クハ今如クハ 全

買に其さるる瓜きのを清糸

糸はふらふらとひふの人のこり

全

解糸をとるもろくあはれ杜そ

思をいりりれりあはれ安こ

全

河舟に杉糸を張ふこゝろは月

まらふらふらとまはれ口上

全

知ぬ境は垣もあや

草丈と一亩はくふささるる

全

目ふさりれおと抱きよ海はり

海んとつとささるるあな仲人

全

細れ音子肌はれは

塔



此下志を山背の諸侯より 全

大坂も志に此よりぬる寺

蘇子此より著るに寺に著るに 全

初平小何を同書に持る

清はく白ふふく此を風 全

里此習ひ此戸も此ぬし

在風名も此の鏡此葉とる 全

在と子杖を去ぬに相する

小信、懐保身ハ美凡 全

考子二豆層と此書に此

剛ハ源子保に此望此大相 全

Handwritten text on a vertical strip of aged paper, likely a label or note. The text is written in a cursive style and includes the characters 山崎 (Yamazaki) and 氏 (Shi), indicating a name or family name.

秋小冬〜〜〜何〜〜〜

次冬〜ハ京より少〜能家子 亥

次秋ハ似〜〜〜

葉疏〜〜〜魚魚の像 全

風名家と持音子京と〜

み子様〜〜〜あき〜 全

月夜子〜〜〜

〜〜〜破〜〜〜 全

〜〜〜物〜〜〜

家中子〜〜〜伯父 全

踏車〜〜〜

来下  
11

紙情の志は初め 玉露 暮

前多神代入りふあふあふ

子苗代代とれ管 流や 全

流やとほを新市代流

をふるはまぬぬわらきき 全

歌仙

暮

おと流き雪り初海や初と流

妻はくぬれきれ山 己晩

城建さち工も層屋くけわく 岸虎

あこのぬいそくか葉あり 違二

色るまはまも月夜をさや 兎士

板敷く、市たきり、

虫

響るふいふ、あはれ、

虫

毎、親と、え、子、庭、

虎

出、さ、ぬ、粽、世、と、

二

大、津、中、跡、を、

士

恋、の、糸、は、ま、る、

虫

同、も、志、く、

虫

昔、く、

虎

小、信、ハ、

二

五、色、も、

士

況、や、

虫

始、入、

虫

梅、子、

虎

知、子、<sup>ナシ</sup>と、

二

親、考、

士

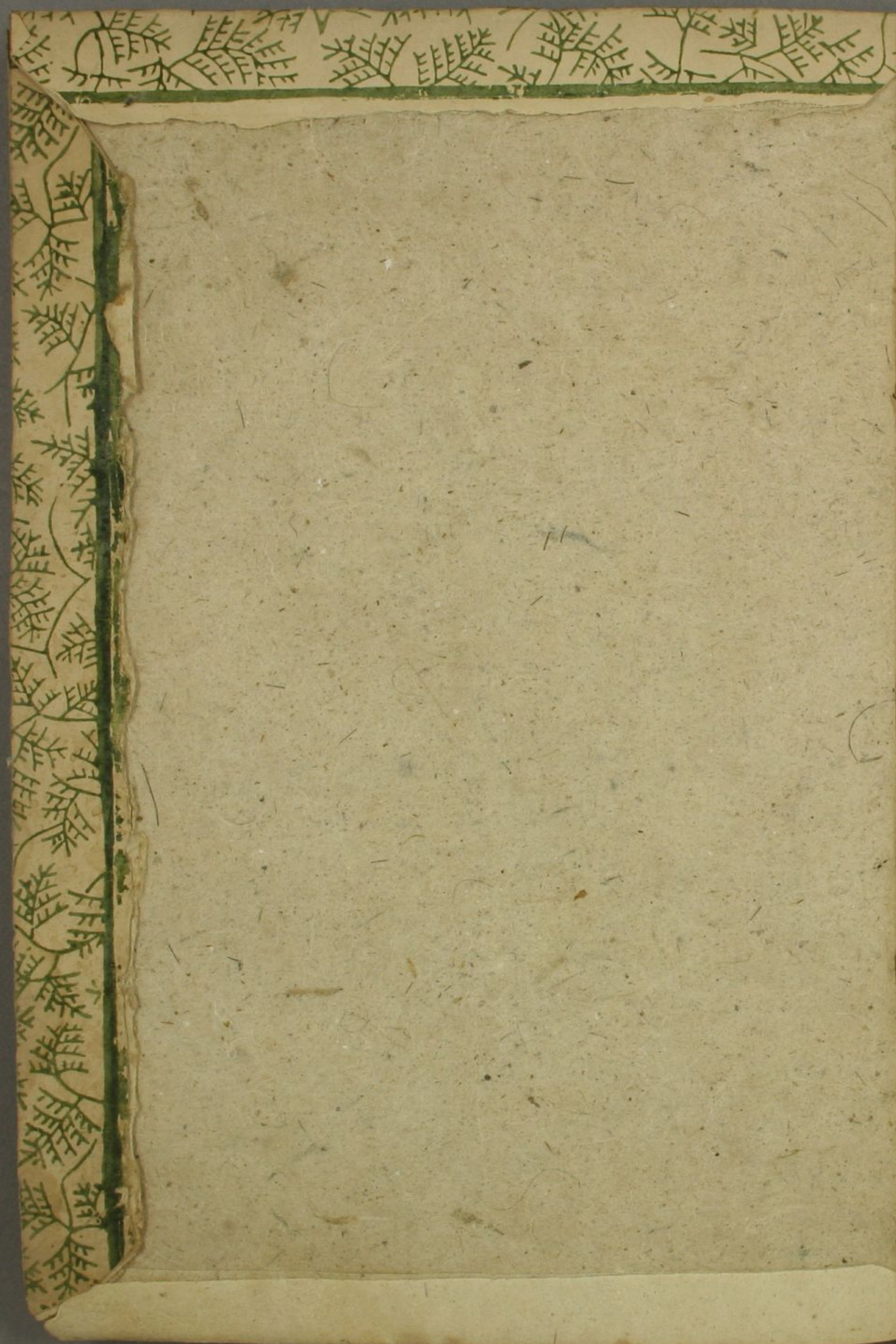
お、く、

虫

裸も時紅蜘蛛の房さそ  
 足明を何やう朝ふらんく  
 湖と田小種お宰人  
 多妻切子増お命ハ時お紅  
 大雄子腰とけけおさし  
 夕了おハお種くし夢く小指く  
 おおれ借忘さくくおくお  
 鼠の房おぬ茶子おお房月松  
 二 虎 兎 虫 士 二 虎 兎

那原を流くお小灯とる  
 狭路ハ振くおく種く四十さ  
 女房おしおさやふささ  
 美お子も小おおおおお  
 新——おのハお子 一を  
 川端くおおおおを白りとく  
 兼おおおおおおお  
 二 虎 兎 虫 士 二 虎 兎

兼おおおおおおお  
 兼おおおおおおお



拍佐

列

②

